Benesse Report

データで教育を読む

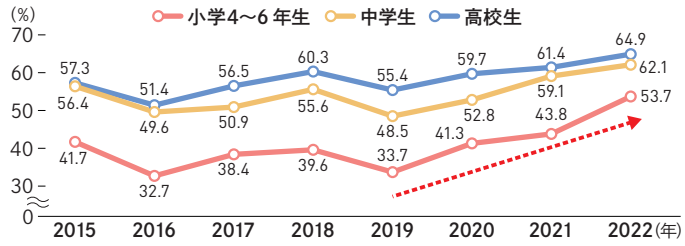
第21回

コロナ禍とデジタル化での子どもの学習意欲と学習方法

2020年以降、コロナ禍やGIGAスクール構想など、子どもの学習環境に大きな変化があった。それらが、子どもの学習意欲や学習方法にどのような影響をもたらしているのか。また、どのような課題があるのか、データから探っていく。

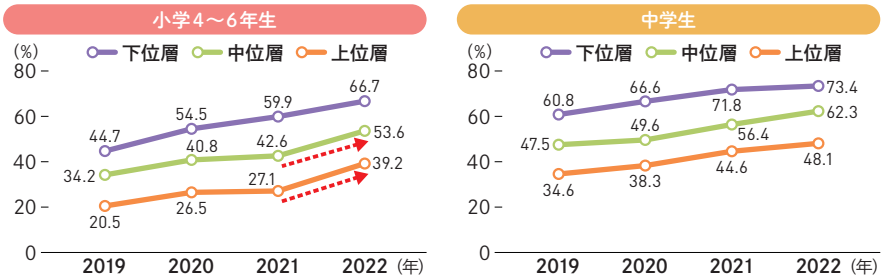
1 成績やデジタル機器の活用頻度に関係なく、学習意欲の低下が進行

図1 「勉強する気持ちがわかない」の肯定率（学齢別）



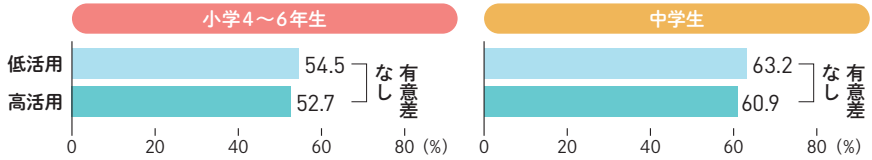
【図1～3共通】
注）数値は、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の合計の比率（%）。

図2 「勉強する気持ちがわかない」の肯定率（成績別）



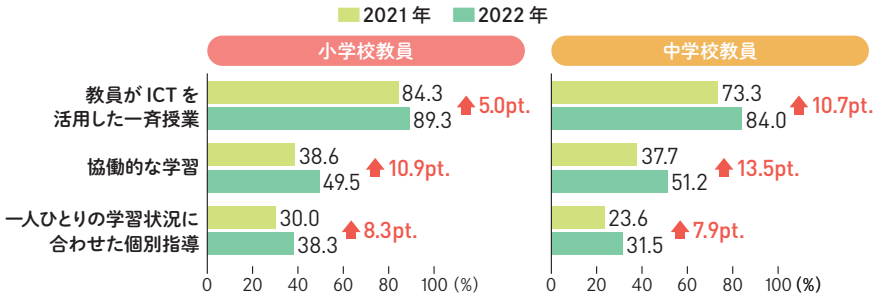
注）成績は子どもの自己評価。各教科5段階の合計得点を基に「上位」「中位」「下位」が均等になるよう3分割で集計。

図3 「勉強する気持ちがわかない」の肯定率（学校でのデジタル機器の活用頻度別）



注）学校でのデジタル機器の活用頻度は、週2回以下を「低活用」、週3回以上を「高活用」として集計。

図4 1人1台端末の授業での実現度（学校種別）



注1）数値は、「かなり実現している」+「まあ実現している」の合計の比率（%）。
注2）図4のみ、出典は、ベネッセ教育総合研究所「小中高校の学習指導に関する調査 2021・2022」。

小学生の中・上位層で特に意欲が低下

コロナ禍での3年間で、子どもの学びには大きな変化があった。中でも「勉強する気持ちがわかない」の肯定率が増え続け、2022年調査ではコロナ禍前の2019年調査比で、中学生は約14ポイント増加。小学4～6年生は20ポイントも増加して、ついに半数を超えた（**図1**）。小学4～6年生は、低・中学年時に臨時休業を経験しており、2020年調査時点で学習習慣の定着への懸念が明らかとなっていた。そうした状況が、中・高学年になってから学習意欲に影響した可能性がある。

また、成績上位層ほど学習意欲は高いものの、すべての成績層で学習意欲の低下が進んでいた（**図2**）。特に、比較的問題が少ないとされてきた小学4～6年生の成績上・中位層の意欲低下が目立つ。今後、中・高校生へと学齢が上がることを考えると、大きな課題だろう。

ICTの活用だけでは意欲は上がらない

直近の1年間の学習環境の変化として、「GIGAスクール構想」の進展によるICTの活用頻度と学習意欲の関連が注目されたが、2022年調査時点では、ICTの活用頻度と学習意欲に関連は認められなかった（**図3**）。

教員を対象とした別調査で、1人1台端末の授業での実現度を見ると、授業での利用は増加傾向で、一斉授業では8～9割ほど活用されているものの、協働的な学習や個別指導での活用率は3～5割にとどまっていた（**図4**）。利用が増えてきた今後は、どのような場面でどのように使い、子どもの学びを充実させていくかが問われていくのではないだろうか。

出典「子どもの生活と学びに関する親子調査」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる調査。小学１年生から高校３年生までの同一の親子約２万組を対象に 2015 年から毎年調査し、2022 年で８回目を迎えた。子どもの成長のプロセスと、それに影響を与える要因を明らかにしている。

※調査方法は、2015 年～ 21 年は郵送で、2022 年は Web で実施。集計は、設問ごとに回答が不明なものを除いた実回答数を分母とする。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。
https://berd.benesse.jp/special/childedu/

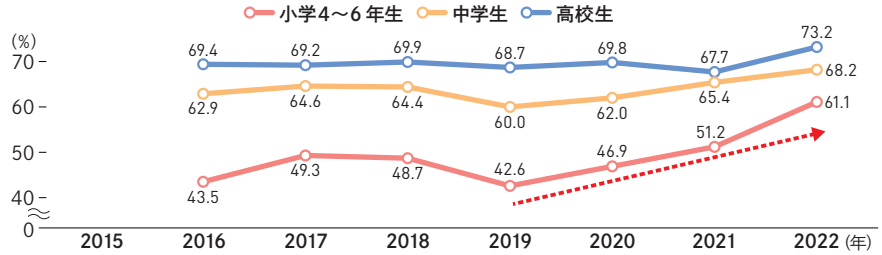
データ解説

ベネッセ教育総合研究所
教育研究推進室　研究員
松本留奈 まつもと・るな

乳幼児から高等教育まで幅広い教育段階において、子ども、保護者、教員を対象とした意識や実態の調査研究に多数携わる。自律的学習者が育まれるプロセスと、そこに対する適切な支援のあり方に関心を持っている。

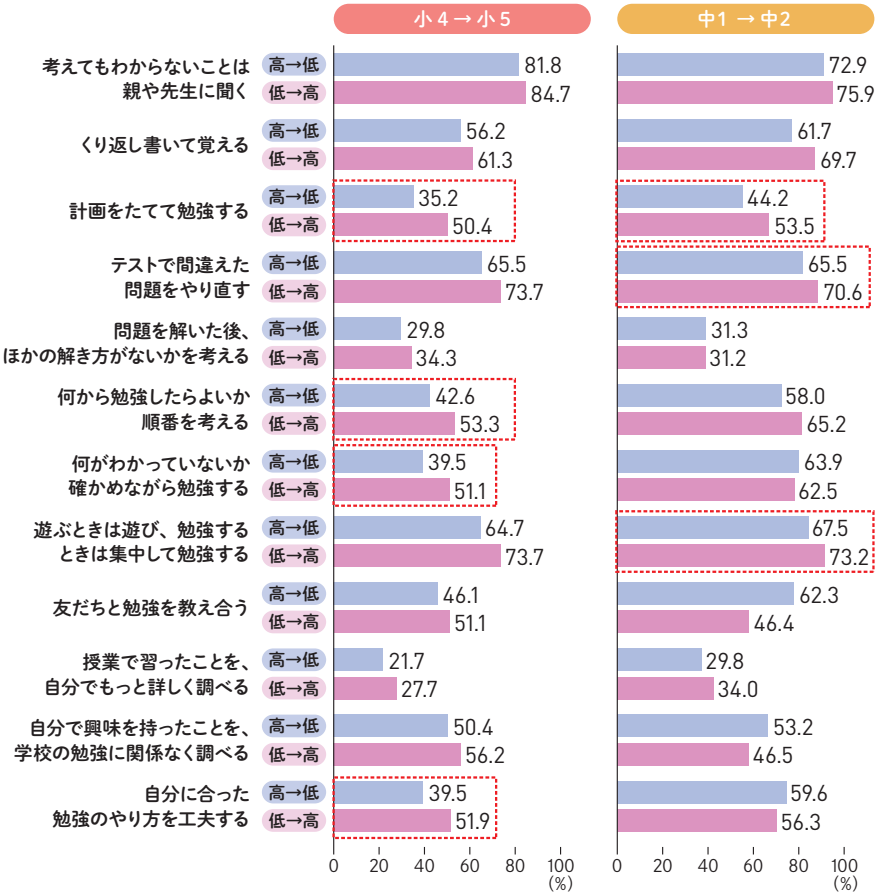
2 上手な勉強の仕方が分かるよう支援することで、学習意欲の向上につなげる

図5「上手な勉強の仕方がわからない」の肯定率（学齢別）



注）数値は、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の合計の比率（%）。2015 年は、質問項目なし。

図6 取り入れている学習方法（学習意欲の変化別）



注１）数値は、「よくする」+「ときどきする」の合計の比率（%）。
注２）「勉強する気持ちがわかない」に対する回答が「とてもあてはまる」「まああてはまる」を意欲「低」群、「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」を意欲「高」群とし、学習意欲に変化のあった「高→低（意欲低下群）」と「低→高（意欲向上群）」のみを抜粋して掲載。

上手な学習方法が分からない子どもも増加

学習意欲を高めるために、どう支援すべきか。注目したいデータがある。

「上手な勉強の仕方がわからない」の肯定率を見ると、2022年調査では2019年調査比で、中学生は約８ポイント、小学４～６年生は約19ポイントも増加（**図5**）。小学４～６年生の肯定率は中・高生に近づき、**図１**の学習意欲の低下と同じ動きが見られた。

学習方法への不安と学習意欲には、相関があることが本調査で確認されている（図表省略）。そこで、学習意欲を高める手立てとしての学習方法に注目し、支援策を考えたい。

学習意欲が高まる学習方法とは？

図6は、2021年調査から2022年調査までの１年間での学習意欲の変化別に、取り入れている学習方法を見たデータだ。意欲が「下がった子（高→低）と上がった子（低→高）の差」に注目すると、小学生では、「計画をたてて」「順番を考え」「何がわかっていないか確かめながら」「自分に合った勉強のやり方を工夫する」の差が大きかった。例えば、できていない問題から順番に取り組むよう計画をサポートすることが重要だと言える。

同様に中学生では、「計画をたてて」「テストで間違えた問題をやり直す」「勉強するときは集中して勉強する」に差が見られた。定期考査のある中学生には、テストに向けて計画を立てたり、テスト後に間違えた問題を復習したりするサポートが大事となる。また、部活動などで忙しくなるため、メリハリをつけて勉強できるようにサポートすることも、学習意欲の向上につながると言えそうだ。